

株式会社さくら都市総合研究所

清水 秀幸  
主 席 員  
研究員

10 長野市のまちづくりの検証

本章からは、前章で述べたキーワードを前提に、今日までの同市のまちづくりの過程や現状を検証し、具体的に将来の方向性を探っていく。まずは中心市街地をその起点に据えてスタートする。

同市のまちづくりの原点が、善光寺にあることは言うまでもない。中でも、中心市街地の骨格をなす善光寺を起点とした南北の善光寺参道(以下表参道)は、まちづくりの「都市軸」として、歴史上中心的存在の役割を果たし、門前・市場・宿場といった多彩な機能を、千年以上にわたる歳月で醸成してきた。

また、善光寺の門前には、宿坊や院が軒を連ね、旅籠・商家が集合し、小路や小道が表参道を中心に格子状に張り巡らされたことで、独特の「寺町文化」を醸しだしながらまちの骨格を形成し、商業都市としての基盤を構築している。

加えて、善光寺から長野駅に至る高低差40m、延長1.8kmの表参道は、末広町に至るまでほぼ直線で結ばれ、その都市軸に広がる街並みは、見事な対称性を構成し、「善光寺表参道ビスタ」と呼ばれる全国屈指の仏都を演出する。

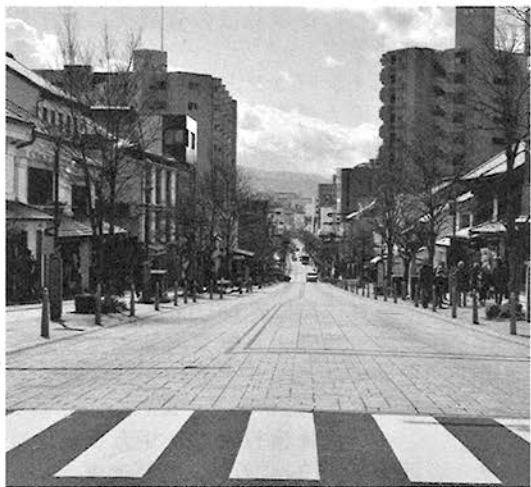
片や、明治以降、表参道に並行する西側(妻科地区)には、県庁をはじめ官庁街が配されたことで、古い歴史をもつ権堂町界隈の花街とコントラストし

て、厚みある首都機能を増幅させている。

また、県庁と市役所を結節する昭和通りは、新田町で表参道と交差し、その周辺や沿道には、多くの企業や金融機関によるビジネス街が包摂したことで、市中心部の一大交流ゾーンを完結している。これらは、善光寺という悠久の霊場を祖とする寺町文化・巡礼文化の象徴的街並みであり、城下町であればまず歴史上存在することのなかったものである。

近年の表参道は、さらに車道幅員を減らし、歩道を拡げたことで、道路空間の再配分

の推進を図っている。加えて、歩車道の石畳化、ポケットパーク・モニUMENTを取り込んだ修景の美装化を具



表参道から市街地を望む

創生にも対応できる、柔軟性ある空間の演出を創り出している。これらの造形は、2002年からはじまった地元商店街の主體的取り組みとともに、「歩行者優先化」を前提に、行政も巻き込んだ多くの社会実験により実現した成果であり、全国的にも注目されるまちづくりの可視化事業の実証である。

そして、末広町界隈から表参道に沿って歩くと、ビル立ち並ぶ景観から、徐々に低層で堅固な漆喰蔵造りの和風商家が増え、さらに石畳を前に進むと、宿坊・仲見世・茶屋など昔ながらの歴史ある通りに誘われ、善光寺本堂に到達する独特の物語、シナリオが用意されている。

これらは、悠久の歴史とともに巡礼者達と現代人が合同して創り上げた、長野市のランドマークであり、後世に伝承すべき遺産なのである。(続く)

清水 秀幸氏(しみず・ひでゆき) 1952年長野市生まれ、76年明治大学政経学部政治学科卒。2013年6月株式会社守谷商會役員を退任し、同年7月株式会社さくら都市総合研究所を設立。長野市都市計画審議会専門委員ほか3委員、その他各地方自治体の審議員・部会員を兼任。現在同研究所社長